

平成 28 年 6 月 29 日現在

機関番号：32501

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885076

研究課題名（和文）保健室の誕生と機能の変容 - 学校看護婦による治療・予防から養護訓導によるケアへ -

研究課題名（英文）School Infirmary Establishment and Functions Modifications- Treatment and Prevention by the School Nurse and Care by Yogo Teacher

研究代表者

竹下 智美 (TAKESHITA, Tomomi)

淑徳大学・総合福祉学部・講師

研究者番号：90735193

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、1900年代～1920年代の学校における保健室の設置、および機能の形成・発展過程を明らかにすることを目的とし研究を行った。その結果、大きく以下の3点が明らかになった。

明治中期の学校衛生施設は、「医者が来るまで」のケアから「学校においてできるだけ療養」のための設備として誕生したこと、医務室は、アメリカ、イギリスを中心とした近代西洋医学の積極的に受容し、診療機能が付加され多機能化が進んだこと、健康教育運動を背景に養護教諭の設置が進み、衛生室がスクリーニング、予防教育、勧告、治療を一貫させ教育活動を支える設備となったことを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This paper attempts to clarify the set up of the school infirmary as well as the state of its functions and its development process between 1900 and 1920. The results have shown the following three points.

1-Hygiene facilities at the school during the middle of the Meiji era changed from the facilities of “until the doctor arrives” care to see the start of the facilities designed for “the treatment the school can provide”. 2-Modern western medicine contents were vigorously incorporated mainly from the United States of America and from England, and medical care functions were added leading to the advancement of multi-functionalism. 3- Screening, preventive education, counseling and treatment were made consistent along with the establishment of the school nurse facilities and became facilities which support the educational activities.

研究分野：教育学、学校保健学

キーワード：衛生室 学校看護婦 保健室 施設・設備 学校衛生 大正期

## 1. 研究開始当初の背景

今日の多機能化する保健室の本質的機能は、医学的機能が、それとも教育的機能が問われている。しかしながら、これまでの議論では、今日の養護教諭の職務機能になぞらえられた保健室論に終始し、保健室設置の本質的意義の検討が中心課題として取り上げられることはなかった。

本研究では、保健室がどのような機能を持ちながら設置され、今日の保健室空間を形成するに至ったのか、その変遷過程を明らかにしながら保健室の本質的機能を顕在化させる試みである。

保健室を対象としての史的アプローチ、また体系的研究は皆無であるが、日本学校保健会編『学校保健百年史』(第一法規、1973年)、杉浦守邦『養護教員の歴史』(東山書房、1974年)において、学校保健の制度史の中にその一断片をみることができる。

しかしながら、以上の課題に接近する考察は行われていない。保健室の機能は、教育的か医学的かといった議論の中で注目されながらも、その変遷は、学校衛生時期区分(「医学的学校衛生(治療室)」、「社会的学校衛生(医務室)」、「教育的学校衛生(衛生室)」)に対応した施設の機能を指摘するにとどまっている。その理由は、第一に、保健室における活動は、多様な人々によって展開されているにもかかわらず、その機能は、学校衛生の活動主体とされている学校医や学校看護婦にのみに焦点化され、それら変遷(一般教員や子ども、保護者、地域による学校衛生活動をほとんど含むことのない狭義の学校衛生史)に対応しながら形成されたと認識されていたこと、第二に、学校衛生活動は、「空間」や「モノ」に規定される活動が多いにもかかわらず、それらに対する認識が乏しかったことにあるといえる。

このような状況から、保健室の本質的機能に迫るための第一次的作業として、衛生室(保健室)の誕生プロセスに着目し、そこに設置された「モノ」とそれに関わった人々の思想や実践を分析しようと試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、学校における保健室の設置、および機能の形成・発展過程を明らかにすることを目的とする。

具体的検討課題は二つに大別できる。明治期末に誕生した「静養室」が、大正期以降の学校看護婦の設置数増加とともに「衛生室(保健室)」へと展開する発展過程を明らかにする。「衛生室」に配置された養護訓導の職務が、「衛生室」に設置された設備・備品に規定されながら変容していくプロセスを史的アプローチにより明らかにする。以上、二つの課題に対し、史実の実証を行うとともに、学校看護婦から養護訓導への職務の変化と設置された施設・設備品の中でせめぎ合い

ながらその空間に内在化されていく「衛生室(保健室)」のケア機能を明らかにする。

## 3. 研究の方法

第一に、明治末期に誕生した「静養室」が、「衛生室」として発展的機能を有するまでの過程を、新たに発掘した学校衛生関係史料によって明らかにする。「衛生室」が法制化によって必置に至ったのは、1941(昭和16)年である。戦後の保健室は、その機能において連続性は明らかなものであるにも関わらず、史料の限界から、戦中戦後の断絶の中で存在理由も切り離されてきた。また、施設(衛生室)やその設備品といった本研究の対象が、「モノ」、「空間」であることから、各学校の配置図や図面等を収集し分析し、その連続性と断絶を描き出す。

その上で、学校医や学校看護婦、その他の様々な人々とともに発展したとされる学校衛生施設「衛生室(保健室)」に設置された設備品が誰の手によってどのように設置・利用の実態を明らかにする。

第二に、明治末期から昭和10年代の学校看護婦から養護訓導への職務の変遷、すなわち、キュアからケアへと変化する職責のなかで、今日につながるケア機能が、「モノ」との相互関係の中で形成されている側面と必ずしも、施設・設備品に規定されない実践として行われていたことを学校看護婦の手記や雑誌『養護(学童養護)』等で確認する。

## 4. 研究成果

(1) 明治期から大正期の学校衛生施設は、師範学校の寄宿舎の病室から始まり、診察室、検査室、医務室、薬品室、幼稚園の摂生室、休養室、そして小学校のトラコーマ治療室、静養室、休養室等様々な名称で登場した。この機能は、伝染病予防、休養、身体検査、診療、救急処置、学校医の執務、検査器械の保管等、この時期から多くの学校に設置され、様々な機能をもっていた。なかでも、明治中期学校救急設備は、三島通良の「生徒の不快に対して相当の手当を行う設備」として設備されたのを出発点に、その設備をめぐって繰り広げられる学校救急設備論を通じて学校における救急処置の範囲を決定していくものであった。さらに、実際的使用上から教育上、経済上、管理上の観点から考案すべきものとして教員による救急設備の考案を奨励し、救急処置が教員の職務であることを強調されていた。しかしながら、こうした目的で紹介された学校衛生設備は、この時期の小学校設備準則や高等女学校設備準則等では、一切触れられず制度化されることはなかった。

明治後期に入ると、学校衛生施設設備もまた自由主義教育の影響を受け、個人の多様な健康問題に対応すべくその施設・設備の完備が求められ、学校衛生設備は、一室へと空間

的広がりを見せた。

ここで登場した静養室や休養室は、これまでの外科的な救急処置から腹痛や吐き気等の内科的で慢性的な疾病へのケアも含む設備として空間的な拡大を見せた。こうした設備は、単に、寝台、薬品等を備えるに止まらず、壁には、子どもの好む桃太郎や色彩豊かな花鳥の絵が飾られ、軽傷者のための絵本を備えつけられることとなった。

以上のように、学校衛生施設設備は、「医者の来る迄」の設備から静養室や休養室等の設置とともに「学校でできるだけ療養」のための設備として、これまでの短時間でできる救急処置から長時間のケアを行うための空間を学校に確保することとなった。同時期に蔓延したトラコーマの予防的治療施設として学校に設置された治療室は、トラコーマの初期における予防的治療として認知され、学校衛生設備に公衆衛生的機能を与えた。こうして学校における初期のトラコーマの点眼が、学校医指導の下、教員による治療が認められるようになった。

(2) 大正期に入ると 各地方の実態に即し徐々に進めること、その効果を挙げ、世間に学校衛生の必要性を理解させるといった三つの学校衛生の方針の下、学校医と教員の距離を少しでも近づけるように医務室が設置された。そして、衛生視察簿が整えられ学校医の職務の充実と、教員と校医の児童の健康に関する連絡施設として学校衛生施設が発展した。学校衛生技師会議では、積極的な意見として、欧米の状況を視察し、より進歩的な海外の学校衛生を取り入れたいという意見が出され、学校衛生課長に任命された北豊吉は、海外の学校衛生の状況を視察するために欧米を視察することとなった。帰国後、北は、機会があるごとに、視察報告をし、特にアメリカのスクールナースやイギリスの学校診療所を優れた事業として紹介した。

学校診療という学校における治療行為の取り入れは、これまでの学校衛生から、脱皮する大きな原動力になったといえる。学校診療所の大きな特徴は、一般の救済的な社会施設とは異なり、学校教育上の必要から設置されていること、スクリーニング、予防教育、勧告、治療を一貫させ教育活動を支える設備であること、学校病といわれるような軽微疾患を扱っていることであった。この学校診療所の設置は、単に児童生徒の健康を守り教育上の効果を上げるためだけの機能だけに止まらず、明治期までのスクリーニングのみの活動から、スクリーニング、治療、予防というように、活動の一貫性をもたせることを可能とし、学校衛生を一種の学校教育活動として位置づけた。これら一度に多くの子どもを効率よく治療することを可能にした学校診療所は、学校衛生の効果をあげるという意味において、非常に有意義な施設として

日本の学校においても位置づいていった。

しかしながら、地方においては、多大な費用のかかるこれら診療所は、財政上、不可能で、そのほとんどが学校内の治療室や医務室に設置されるアメリカ型であった。診療科目も1科目から数科目に限定されたものであり、特によく見られたのが寄生虫除去や歯科治療であった。さらに、保健室に設置される医薬品にも変化が見られた。

(3) 大正後期、東京市において法制化された学校医薬品は、三共製薬会社よって100種類にもなる医薬品が選定されていた。これらには、明治期の救急処置では考えられなかった内服薬まで含まれるようになった。こうして学校には、救急処置の設備からトラコーマや歯科の治療設備、さらには、歯みがき指導用教材まで検査、治療、教育、予防訓練というあらゆる設備が整えられ、明治期の学校衛生薬品器械とは比べものにならないような衛生の知を集結させた専門的なものが備えつけられるようになった。

以上のように新しく誕生した医務室は、衛生室と名付けられ、教育の目的の達成を支えつつ学校衛生自体、教育として一貫するような努力を重ねた結果、救急処置、学校診療、健康相談、検査場、休養室、学校衛生資料室等、多くの機能を集約した設備として設置されるようになった。

そして、学校看護婦における実践の多くは、この学校衛生施設・設備とのかかわりの中で営まれた。学校によっては、階段下のわずかな四畳半程度の衛生室しか場を与えられず、困難を極めた例もあった。このような例は、雑誌「養護」「学童養護」の実践紹介の中でいくつか紹介され、実践と施設・設備の狭間で、様々な工夫を行いながら職務を実行する養護教諭の姿として現れていた。

## 5. 主な発表論文等

〔学会発表〕(計3件)

瀧澤利行、七木田文彦、竹下智美他、養護実践にみる教育保健機能の検討、日本教育保健学会、2016年3月、茨城大学教育学部

竹下智美、明治から昭和初期にかけての学校救急処置の展開 -学校における救急処置の意味と役割-、日本学校保健学会、2015年11月、岡山コンベンションセンター

七木田文彦、竹下智美、養護訓導の量的拡大過程-1940年代の学校への配置状況-、日本学校保健学会、2014年11月、金沢市文化ホール

〔図書〕(計1件)

竹下智美他、大空社、雑誌『養護』の時代と世界-学校看護婦はどう生きたか-、2015、237 (pp.103-133)

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

竹下 智美 (TAKESHITA, Tomomi)  
淑徳大学・総合福祉学部・講師  
研究者番号: 26885076